



2



1 約400年前と変わらない五福校区の町名。まちを歩くと、古地図と現在、道がほとんど変わっていないことがわかる。「中唐人町」はかつて、交易にやってきた唐人（中国人）が住んでいたと言われている

2 明治8年に架設されたことから名付けられた石橋「明八橋」。「新町」と「古町」を結ぶ橋で、五福校区を代表する風景の一つ。名工橋本勘五郎の作品でもある。現在は人と自転車のみが通行でき、街灯やベンチが設置されたくつろぎの場となっている

400年続く町の名に 江戸の暮らしの名残り

熊本城

の城下に広がる五福校区。

「古町」とも呼ばれ、加藤清正により造られたまちです。校区内には碁盤の目状の町割りや町家、レンガの防火壁、坪井川にかかる石橋、多くの寺などが点在し、風情ある街並みが続いています。

五福校区の誇りの一つは、加藤清正が定めたという町名。米屋町（こめやまち）・呉服町（ごふくまち）・細工町（さいくまち）。



「きらり」でつながる
ごふく
五福
校区

清正公が創り、 21世紀に受け継ぐまち

「過性の『イベント』でなく 伝統の『行事』に育てたい

そんな

五福校区で校
区自治協議会

会長を務める松田清見さんも、

紺屋町（こうやまち）・万町（よろずまち）など、校区内の16の町名は、当時そこに住んでいた職人たちの職業に由来しています。江戸時代、道の両側には坪井川から荷揚げされた商品を扱う問屋や、こだわりの職人の店が並び、大きな商店街のような賑わいだっただのかもしれない。明治時代には、熊本の商業・経済の中心地となり百貨店や映画館が立ち並んでいたそうです。

昭和中期、町名変更の話があったとか。しかし、住民のみなさんの強い要望で、変更しないことに。校区の伝統と歴史に愛着と誇りを持ち、受け継いでいくという思いの強さを感じるエピソードです。

五福の歴史や伝統に誇りを持つ住民の一人です。「まちづくりは、長い歴史と伝統を守り、つないでいくこと」と語る松田さんは、伝統を受け継ぐことは、歴史観や価値観を受け継ぐことだと考えているそうです。「町名も、町割りも、みんなで力をあわせて守ってきたもの。次の世代にも伝えていきたいと思うんです。いい意味で縦と横のつながりを大切にしたいですね」。

松田さんのまちづくりへの思いは、新しく催しを行うときの話し合いなどにも生かされています。「イベントは一過性。でも『行事』になれば伝統になります。これまでのまちの歴史や伝統とどうつながっていくのか、その後、どうつなげていくのか、しっかりと考えてからやれば、五福校区の行事になり、盛り上がりはまちの元気につながっていきます」。

町家の雰囲気を守る町並みガイドラインが作成されている五福校区。新しい感覚で、いわゆる「ウナギの寝床」の造りをもつ町家の魅力を活かした店舗もオープンしている。